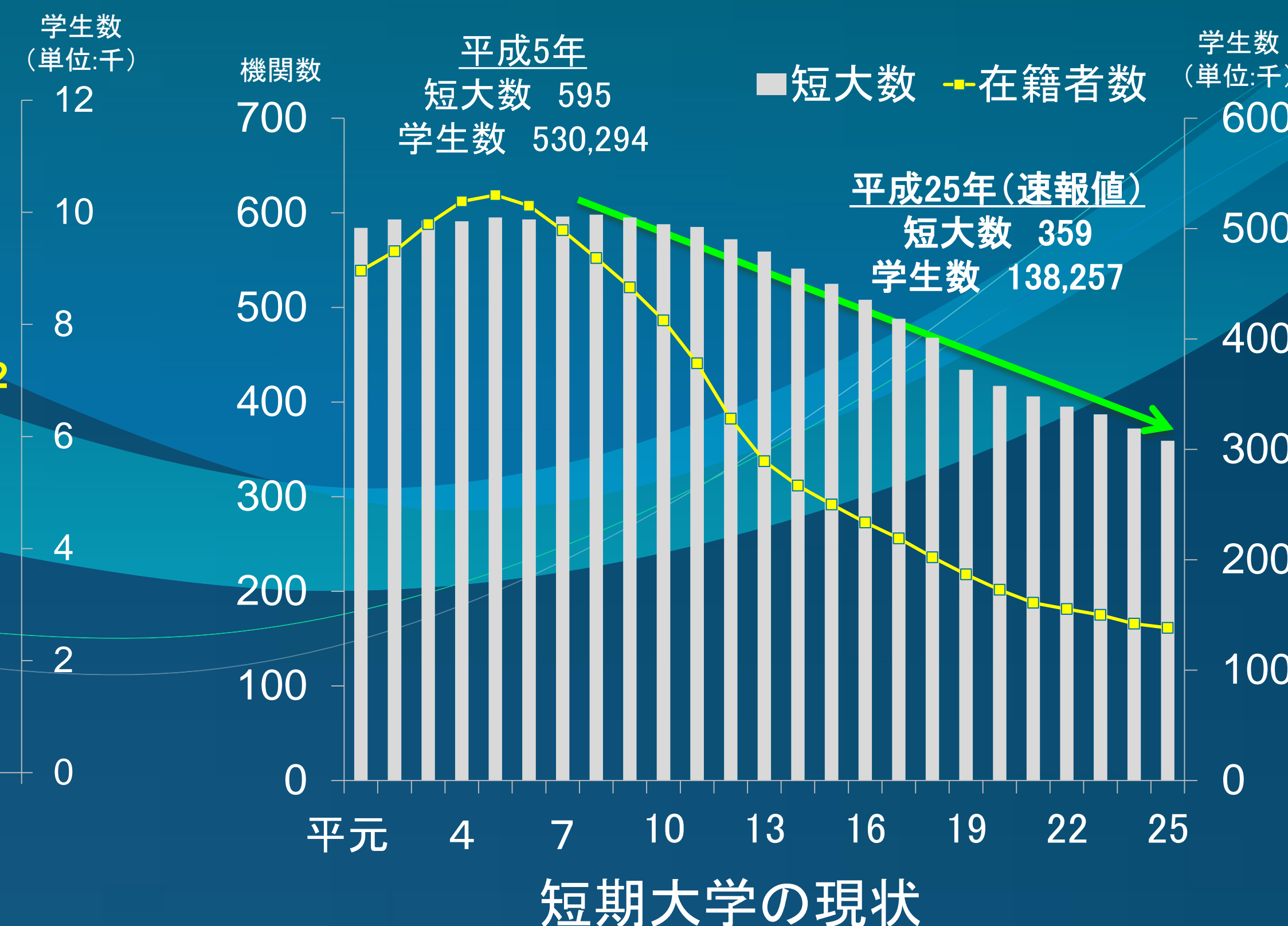
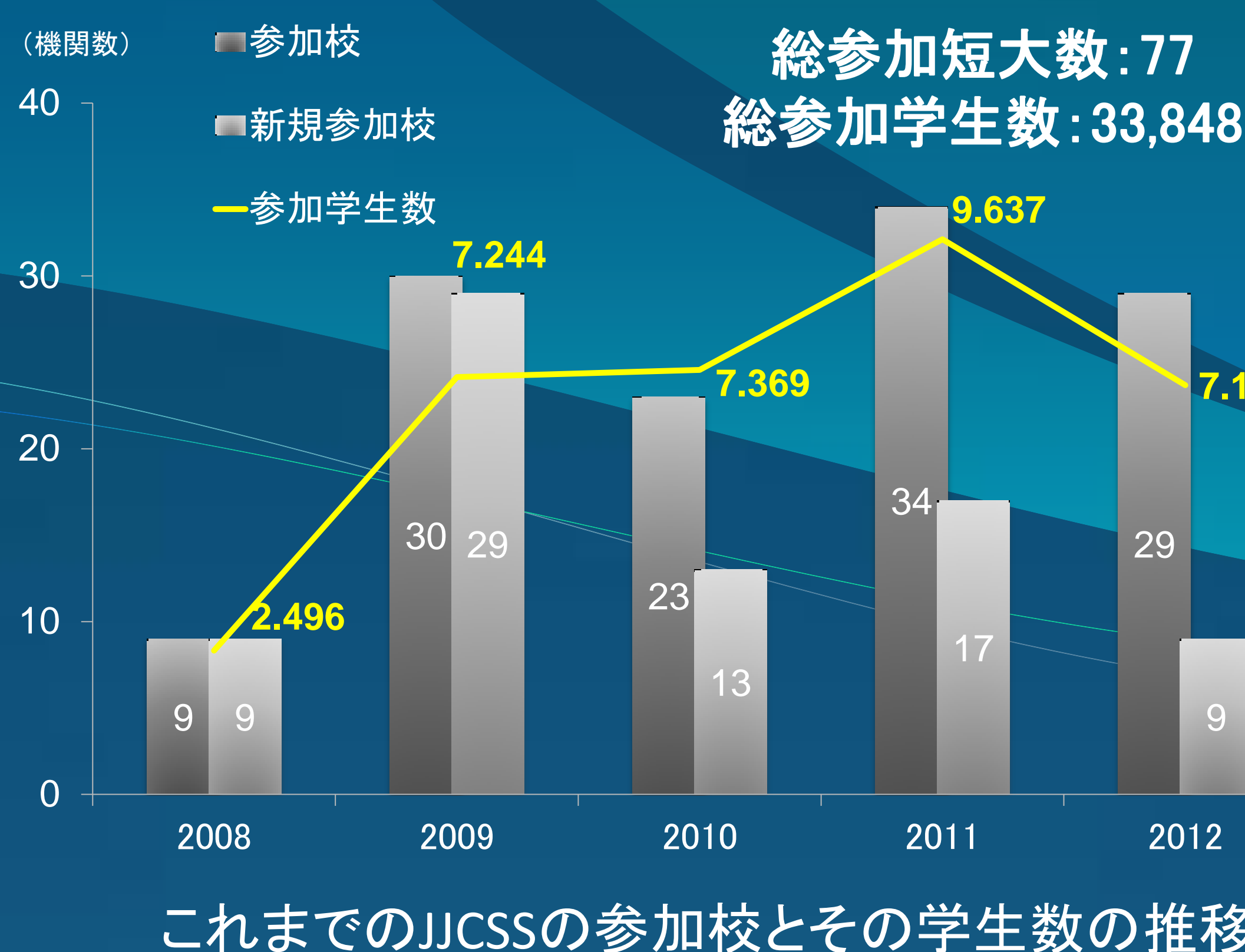


# 短期大学学生調査 (JCSS) とは

Japanese Junior College Student Survey  
2008年度より開始

・研究開発機関  
短期大学基準協会調査研究委員会  
大学生調査研究プログラム (JCIRP)

\* JCIRP (Japanese Cooperative Institutional Research Program) 同志社大学の山田礼子教授をリーダーとするプログラム  
アメリカのUCLA高等教育研究所の実施するCIRPを模範



## 短大生調査データからわかること(学修成果のベンチマーク)

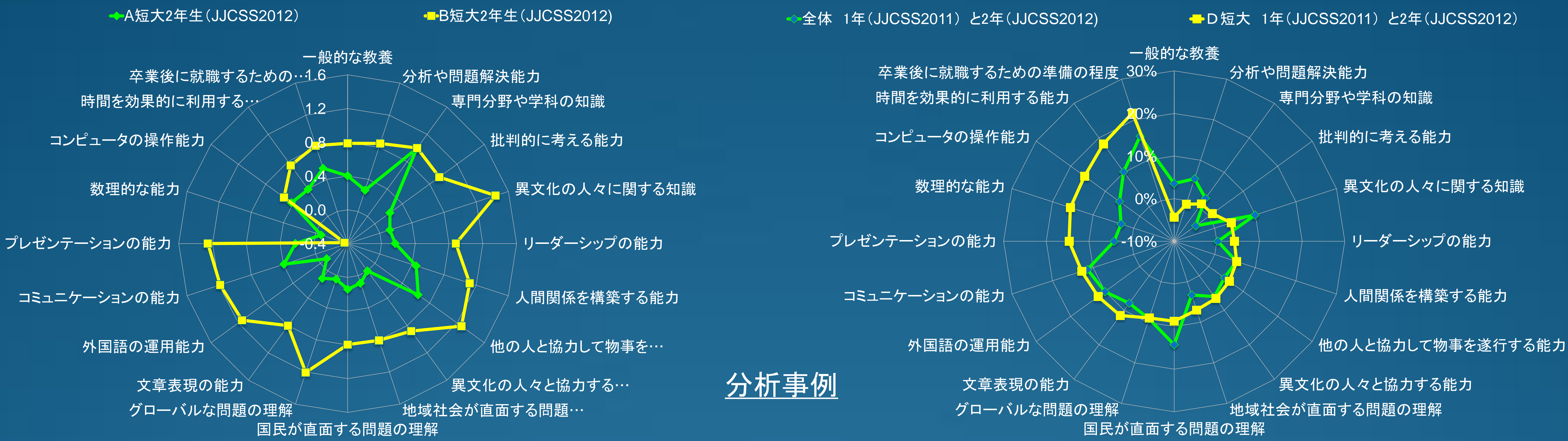


図: 2年生の入学時点からの能力の変化状況(A短大とB短大の比較)

A短大とB短大(JCASS2012)の2年生の能力の変化を比較  
大きく減った-2、減った-1、変化なし0、増えた+1、大きく増えた+2  
として点数化し、その合計点を人数で割ったデータを利用

### 【A短大とB短大の比較】

数理的な能力 +, 専門分野が学科の知識 =  
残りの18項目は全てB短大が上回っている

学校間の差 = 特色ある教育は可能であることを示唆

D短大と全体の1年生と2年生の伸び率の差を比較  
データは、「増えた」及び「大きく増えた」と回答した者の割合を利用。  
2年生の伸び - 1年生の伸び = 伸び率

- (+ プラス)
  - 卒業後に就職するための準備の程度
  - 時間を効果的に利用する能力
  - コンピューターの操作能力
  - プレゼンテーションの能力
- (- マイナス)
  - 国民が直面する問題の理解
  - 異文化の人々に関する知識
  - 分析や問題解決能力
  - 一般的な教養

特徴や課題の明確化

## 新調査票の作成に向けた取組み

### 調査実施後のアンケート

- ・調査項目が多い
- ・色々な質問が多すぎて、何が調査目的かわからない
- ・回答に時間がかかる
- ・項目の適切性について指摘

### 改善の必要性が提示

- ・短大側の調査に対するニーズの把握
- ・調査項目整理
- ・調査目的の明確化
- ・参加短大の負担軽減
- ⇒ 調査票改善のヒントを得るため短大の実施担当者にヒアリング調査を実施

### ヒアリング調査

・調査目的  
短大生調査参加目的や理由、調査データを活用状況  
短大生調査(JCASS)に対する要望や意見

・調査対象  
5短大(JCASS参加経験校)

・調査方法と時期  
半構造化インタビュー法(概ね1時間程度)  
(注: 1校については同一内容の郵送による調査)  
2013年3月下旬から7月下旬

### 主な質問内容

JCASSへの参加理由、JCASSにある関心のあった設問内容や項目、学内で実施している学生調査の種類、調査項目数や実施時間への意見、調査実施方法、返却データの活用場面やデータ分析環境、調査データ等のフィードバックに関しての意見・要望

### ヒアリング調査の結果

- ・調査参加理由  
短大の機関評価等への利用、教学評価等への活用、自大学での独自調査が困難
- ・関心の高い設問内容や項目  
学習(学修)成果、短大満足度(教育/施設・学生支援)、キャリア意識、進学理由
- ・調査票の項目数や実施時間  
項目数が多く標準回答時間内で終わらない  
→ 質問の意図や表現や用語が難解なものが多く、想定以上の時間がかかっている可能性
- ・データの活用について  
学内のFD委員会や教務部会、自己点検・自己評価の会議等で回答結果を検討  
※学内にデータの生成・分析やグラフ・表を作成する(できる)スタッフがない

### 現在の調査票への危惧と改訂の指針

- ・設問項目の多さや回答時間の長さによる学生への負担や調査データの信頼性への不安
- ・データの活用の難しさ

### 明らかになった短大調査のニーズ

- ・学習(学修)成果、満足度など、短大生が短大から受けたインパクトの把握
- ・教育の質保証を図るため、基礎データとしての学生調査への期待

### 考察とポイント

## 新調査票の作成に向けて -調査のコンセプトを明確化し、より短大の実態に即した調査票へ-

リサーチベースの調査から問題解決型の学生調査への転換  
自己点検・自己評価および教学・学生支援サービスの改善への利用  
各短大に対する調査結果の分析レポートを作成する試み

日本の短期大学の実情に合った調査票へと更なる発展  
調査項目数の削減・ニーズに合った調査項目の追加・語句の修正

